柞乃杜

秩父神社社報
柞乃杜（ははそのもり）
第 2 号
平成2年7月23日

御大典の秋

—標山—

いよいよ御大典の秋
来たる平成二年十一月　その十二日にご即位の大礼が
その二十三日には一世一度の大嘗祭が　古式ゆかしく斎行されます

畏くも天皇陛下には
ご即位にあたり　宮中の高御座に就かれて　皇位継承を内外に宣言され
大嘗祭においては　親しく天照皇大神と天神地祇とをお祭りされるのです

〝豊葦原の瑞穂の国〟と称えます日本の国柄は
天照皇大神が　百二十六代におよぶ天皇さまに代々授けられた尊い稲穂を
わが国土に稔らせればこその　世界に誇るべき理想なのです

その理想を体現される　新帝最初の尊い御業なればこそ
この国柄の民として私たちは　挙げてお祝いしなければなりません
さまざまな奉祝の行事や事業に　挙って参加しようではありませんか

中嶋宏子　筆画

私たちの祭り

秩父には　山に武甲があり、
河に荒川がある。
かつての戦いで　国は破れたが、
この山河だけは　私たちに残された。
そして今は——
その山河を犠牲にして、
私たちの生活が営まれている。

〝ちちの実の知知夫の里
ははそ葉の母巣の杜〟と謳われた
秩父の古社は、この山河に寄せた里びとの
かねて床しい心根の産霊ではなかったか。

柞の杜に　鎮める神は、
その御名も　知知夫彦の命とたたえ申して、
その御祖　八意思兼の神にあわせ祀れる—

その神の祭りは　山と河の祭り。
夏の〝川瀬祭り〟が荒川の瀬に神輿を浸し、
冬の〝夜祭り〟は武甲を拝して
その山霊に精一杯の心意気を供覧する。

山河への鎮魂が　私たちの祭り。
この鎮魂なくして
なんで故郷を誇り得ようか。

解説　秩父神社(二)

禰宜　浅見武史

◇ 悠久二千年の歴史

秩父神社が、国史現在社として正史に登場するのは、『三代実録』所載の記事、貞観四年（八六二年）授武蔵国正五位下勲七等秩父神正五位上をもって初めとする。同書には、続く貞観十三年（八七一年）、元慶二年（八七八年）の条に同様の記載があり、秩父神は正四位下にまで昇進している。因みに県内の旧官国幣社である大宮市の氷川神社は元慶二年に正四位上に、児玉郡の金鑽神社は元慶二年に従五位下に昇進の記事がある。この記事は神階贈進と呼ばれ、祭神に奉られた位階を指し、律令時代に始まった制度で、人臣に授けられる位階と同じものである。文献上神階贈進の初見は、天平神護二年（七六六年）で、伊予国の伊曽乃神と大山積神とに従四位下を授けた（続日本紀）とあり、嘉祥四年（八五一年）には、全国神社に一斉に正六位以上の神階が贈られた。神は人間界を超越するものとの現代人的感覚からすると、廟堂に、二位、三位の人達がいるのに、四位以下の神があるのはちょっと不思議な感を抱くが、古代律令の人々にとっては奇妙でも不思議なことでもなかったのである。

尚、国史現在社とは（日本書紀、続日本紀、日本後記、続日本後記、文徳実録、三代実録）この六国史に所載の神社を称す。また、律令時代における神社の格式を証するものに『延喜式』神名帳（九七二年撰）があるが、これに記載された武蔵国三十四座（名神大二座、小二座）には名神大社として氷川神社と金鑽神社があり、秩父郡には小社として秩父神社と椋神社とが見えている。このように、既に貞観年間に秩父神社は武蔵国の有力神社として中央に重んじられていたのである。

東京都府中市に旧官国幣社大國魂神社がある。この神社は元来武蔵国の総社として、その国衙に設けられたものである。この総社に平安中期、武蔵国内の名社六社を勧請し、国の鎮護を祈念する形式が整った。その六社は次のごとくである。

一宮　小野神社（多摩市）
二宮　小川神社（秋川市）
三宮　氷川神社（大宮市）
四宮　秩父神社
五宮　金鑽神社（児玉郡）
六宮　杉山神社（横浜市）

平安期には国司がその着任にあたって、先これら六社に巡拝したという。

五月五日に斎行される大國魂神社例大祭に秩父大神は現在も四宮として府中市の有力な氏子、本町の人々によって荘厳華麗な神輿に御遷霊され愈々御神威を発揚されている。

◇ 知知夫国造

正史に登場する遥か以前に秩父神社は創祀されていたことに間違いはない。古い社伝によれば、遠く二千年以前この地に創祀されたという。そのことを証するものに『先代旧事本紀、国造本紀』に次の記事がある。

知知夫国造　瑞籬朝御世　八意思兼命十世孫　知知夫彦命定賜国造　拝祠大神

知知夫国造には八意思兼神の十代の子孫である知知夫彦命が崇神天皇の時代に任ぜられ、その知知夫彦命が〈大神〉を祀ったという意味である。八意思兼神とその子孫、知知夫彦命、二柱の神の繋りは神祖と斎主。智神の代表神、八意思兼神を斎るにふさわしい知知夫彦命の国造任命と拝察する。本紀に記載された国造の数は百二十六の多くを数える。神武朝より雄略朝にかけてこれらの国造は設置されたものであるが、知知夫国造は出雲国造と同じ崇神天皇の時代に設置された十二の国造の一つで関東で最も古い国造である。武蔵国の起こりは、天武十二年（六八三年）、无邪志、胸射、知知夫の三国造の国を集めて武蔵国司の支配下に置いたのが始まりである。武蔵国が始まる以前、知知夫彦命によって開拓されたこの秩父の地、麗しき山河に、遠き祖先より現代の今に至る私達郷人の上を、変わることなく秩父大神のみ恵は光り輝き、恩頼を垂れさせ給うているのである。

奉祝の秋に寄せて

宮司　薗田　稔

序　日本人の幸せ

いよいよ新帝即位の御大典をこの秋に控え、国を挙げてのお祝いの気運も静かに、しかも着実に盛り上がりつつあります。

顧みますと、平成の御世になりました途端に、その〝世直し〟にふさわしくソ連・東欧の社会主義国家群に大変革が生じました。

そして、第二次世界大戦後の旧いヤルタ体制が一挙に崩壊し、わが国を取り巻く国際関係にも、めまぐるしい変化が訪れようとしている今、この時にあたって、国内では実に、建国以来の連綿たる皇室の慶事が、千古の歴史を継いで、しっかりと行われるということは、考えれば考えるほど、我われ日本人の幸せといわねばなりません。

一　大切な文化

申すまでもないことですが、科学技術の進歩で、ますます狭くなった世界の中で、資源の乏しい日本が繁栄していくためには、政治や経済や環境保全など、あらゆる面で世界に貢献することがまず大切です。

しかし、そのためにもぜひ必要なものは、ゆるぎない伝統文化に裏打ちされた民族の誇りと、あくまで外に開かれた国民意識なのであります。

かねて申しておりますように、日本人とは、いわゆる〝人種〟ではないのです。我われの祖先は、人種的には太古からの渡来人との混血種であって、〝純血〟の日本人など存在しません。だが、〝民族〟としてこそ、我われは日本人なのです。つまり、日本文化を共にするからこそ、我われが日本人であることを、この際しっかりと銘記せねばなりません。

これからは、国内にますます多くの外国人が来日して、我われと一緒に生活することになるでしょう。しかし、彼らがやがて、日本文化を受け容れるようになれば、彼らもまた、立派な日本人であることを、我われは忘れてはならないのです。なぜなら、我われの先祖も、昔はそうして日本人になったからなのです。

それだけに、文化はますます大切なものになります。日本が、今後いちだんと外に開かれて、さらに国際化を強めるからこそ、民族の文化が一層大事なのです。

東欧のイデオロギー国家群も、経済の失敗故に、もろくもその体制が崩れつつありますが、そこで各地に改めて蘇生しているのが、他ならぬ民族の自決なのです。

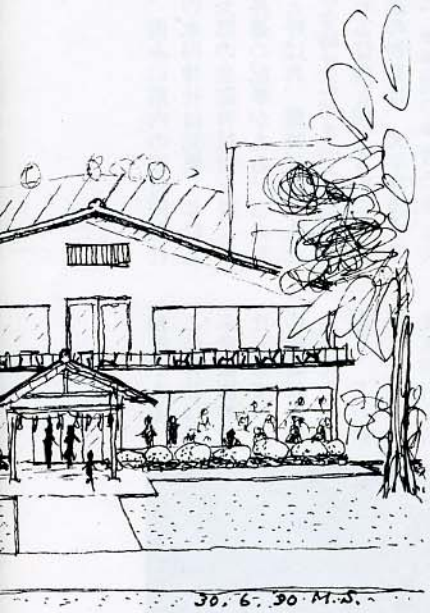
つまり、たとえ経済が破綻して国家が滅びても民族は滅びない。しかし、文化だけは、それがいったん滅びれば、民族もまた滅びてしまうのです。

私ども神社人が、今こそ掛けがえのない皇室文化の伝統を民族の大事と心得るのも、こうした時代の認識あればこそなのであります。

二　奉祝の〝祭りサミット〟

さてそこで、当社が、秩父郡市神社界の応援を得て、秩父屋台・笠鉾保存会を含む「全国曳山保存会連合会」に呼びかけている御大典の奉祝行事が、〝標の山・曳き山・祭りサミット〟という企画なのであります。

来たる十一月十七日に、十万人が皇居前広場に結集する奉祝パレードに、全国から十数基の、いずれも国指定文化財の豪華な山車を曳き据えて、そこに日本の誇る、祭礼絵巻を実現し、御大典の国民的奉祝を内外に宣明しようというものなのであります。



どの山車や屋台も、日本の祭礼文化を代表する重要民俗資料として、かねてその保存に国庫補助を受けているのですから、それこそ、国民文化の頂点を成す御大典の奉祝に、精一杯の奉仕をすることは、ごく当然のことではないでしょうか。

これが、もし実現すれば、その祝祭效果は絶大なものとなり、おそらくはマスコミを通じて、御大典の意義が世界に伝えられると信じますので、なんとか実現に向けて努力をつづけております。

三　記念の崇敬会館

当社の奉祝事業については、すでに前回の創刊号でお伝え申しました。そのひとつが、ちょうど六十年前の昭和天皇御大典に際して整備された境内の御神門と瑞垣、神楽殿及び神札授与所の全面改修でありますが、もうひとつが、旧社務所の跡地に新築する崇敬会館(仮称)の完成であります。

いずれも、今後五年ほどのうちに実現すべく計画を進めておりますが、今回は、とりあえず崇敬会館の素案にもとづいた外観のスケッチをご披露させていただきます。

前回に申し述べましたように、地上二階、一部地下室のL字型の建物です。

「まつり会館」側の歩道から境内に通り抜けることができ、しかも参拝者の休憩や氏子の集会にも自由に活用できる、広いロビーを特徴とする会館なのです。

むかって左手に一階の社務所、その奥および全館の二階部分に氏子奉賛会、氏子青年会、崇敬婦人会など関連団体や社務所の諸施設を配置して、今後ますます充実する神社活動に資するものにしたいと思っております。

結び　マチ造りのために

それにいたしましても、平成の新しい時代をこれから本格的に築いていこうとする今このとき、その進路を定める任務をおびた私たちの責任は、まことに重大であります。

しかし、全世界の運命にも直結するその歩みも、まず、足元の地域社会から始まるはずのものであります。

幸いなことに、本社報の創刊号で、秩父にふさわしいマチ造りのために、その結成を呼びかけました当社の氏子青年会も、大きな反響を得て、四百三十名を越える男女会員となり、去る四月十五日の結成大会を経て、はやくも活発な活動を始めております。

どうか、当社を総鎮守と仰ぎます氏子崇敬者の皆さまには、自然と文化の香り高い郷土秩父の魅力あるマチ造りのために、今後一層のご尽力を賜りますようお願い申し上げます。

表紙説明

昭和天皇御製

弟をしのぶゆかりの館にて
秋ふかき日に柔道を見る

この御製は、第二十二回国体(昭和四十年)のおり、秩父宮記念市民会館にお立ち寄りになられた昭和天皇様が、弟宮様である秩父宮雍仁親王様を偲ばれてお詠みになられたお歌である。秩父宮記念市民会館は、スポーツをこよなく愛された秩父宮様にちなんで、建てられたもので、秩父宮ラグビー場と同じくその御名を戴くものである。

当時の柔道関係者によって、宮様縁りの当社額殿奥深くに、その記録が留められている。

歌題字　伊古田　絢子　筆
「柞乃杜」題字　宮司　薗田　稔　筆

◇秩父夜祭を見学しての感想

レナータ・ソヴィンスカ

東京をめったに離れない私にとって、秩父への招待はとてもうれしいことでした。十二月三日の午前中に池袋駅を出発した時、日本三大曳山祭の一つであり、約三百年の伝統を誇る秩父夜祭の見学ができるということの喜びと同時に、大都会を離れること自体が非常に気持ちの良いことに思えてきました。これまで見た日本の大きな祭といえば、関西の春日祭とお水取り、三年前の祇園祭、そして東京の神田祭などでした。　十二月三日のお昼ごろ秩父駅に着いた時、お土産や食べ物の売り台で一杯になっていた駅前の広場は、既にお祭りの観光客で賑わっていました。秩父神社へ行く道がすぐ分かりましたが、神社に近付くほど人込みが濃くなり、歩きが遅くなりました。

秩父神社の参拝に行く前に、ここに招待して下さった薗田先生の家を訪れました。神社のすぐ近くにある宮司さんの大きなお屋敷は、お祭りの見学に訪れた学生で賑やかになっていました。一息してから神社の方へ向かいました。知知夫国造に創建されたと考えられるこの社は、古代以来の伝統をもち秩父地方の総鎮守社であります。本殿の横壁の華麗な竜と虎の彫刻が私の目を引き寄せました。

神社の境内を出て、私と同じように東京から来た二人の女性と一緒に、夜祭の屋台の進行順路を一周することにしました。町内の祭の雰囲気が高まっていました。秩父駅から絶えず流れるように出て行く人の波が、祭の場に向かっていました。団子坂あたりの場所を確保したい人人は、寒さにもかかわらずじっと立っていました。町は人に溢れていましたが、さすが日本、すべての準備がよく整えられていました。私は、薗田一家のご親戚のご好意のおかげで、秩父夜祭のクライマックスである屋台・笠鉾の進行を、曳路に面している地方庁舎のほとんど真向いにある家と、その庭から見ることができました。最初は、遠くから聞こえる祭ばやしの太鼓の音に、屋台が近付いていることを知らされました。その後、次第に目の前を通って行った六台の屋台・笠鉾は、はるかに私の期待を越えるものでした。大勢の若者の力で引張られる大きな屋台は、無数の軒提灯に照らされて、屋台ばやしのリズムに合わせてスルスルと動いていました。

十二月の夜の暗闇や寒気と非常に対比するこの豪華な明るさと熱気は、とても素晴らしいものでした。他の祭に見られなかった大きな演劇的な効果をもち、見ている人の心は動かされました。

屋台の曳廻しと華やかさを競う大仕掛け花火の大会が直ぐ始まり、その規模と豊かさに驚きました。季節のせいで、ポーランドのことを思い出しました。ポーランドの花火は小さいものですが、真冬の寒い時に上げられます。子供の頃、クリスマスやお正月の時期に、雪に被われた寒い夜の庭で花火を楽しんだ思い出があります。

秩父で見た花火はとても素晴らしいものでしたが、人間の熱気と力が込められている屋台の進行、そして斎場祭は最も感動的でした。また、笠鉾と屋台は貴重な伝統芸術品でありますので　それを次の日に近くから見ることができてうれしく思っています。

秩父夜祭の感想として幾つかの考察があります。私にとって、祭自体は極めて異国風のエキゾチックなものです。日本の祭に当たるものはポーランドにはないとは言えませんが、その特質はかなり違います。キリスト教の伝来以前から伝えられる、季節の移り変わりに関連する幾つかの行事がありますが、その数が少なくてフォークロア(民俗)の分野に属しています。他の民俗行事はキリスト教の影響を受けて、はっきりとした宗教的な特徴をもって、神を拝がむ側面が明確に現われています。例えば、聖母マリア崇拝と結ばれる、毎年八月に行われる大衆的な巡礼は、その一例であります。

日本の祭の華やかな雰囲気に最も近いものは、村や町で行われる宗教的な贖賄を目的にする、教会寄進祭であります。

日本の祭は、数と種類が多いですが、季節や生活感覚をもって、各地方の風土を生かして、素晴らしい遊びを作り出しています。面白さと楽しさは、祭の第一の魅力であります。秩父夜祭の見学のために訪れた何十万の観光客は、真にその遊び気分と、日常と異なる行事の壮観を最も楽しんでいました。

尚、より深く考えて見れば、祭の見学は日本の民族宗教の在り方、そしてハレの行事の意義の問題を考えさせてくれました。祭の本質は、キリスト教とはかなり違っている神観念が含まれています。その問題をこれから勉強したいと思っています。

Sowińska

著者プロフィール

RENATA　SOWIŃSKA
(レナータ　ソヴィンスカ)
１９５９年：ポーランド中央部　トマシュフ　マゾヴィエツキに生まれる
１９７７年：ワルシャワ大学日本学科卒業　日本学修士
１９８５年11月：留学のため来日
１９８９年４月以来：東京大学大学院　総合文化研究科　博士過程
研究テーマ『古代・中世日本のケガレ観念—歴史的な実態と思想』

梟（ふくろう）だより

◆夏祭風景

神輿、笠鉾と共に神社行列は竹ノ鼻斎場に向けて進む。折しも夏祭本番を控えての梅雨の最後の蒸し暑さが、奉仕する者それぞれの額に汗を滲ませる。

行程もちょうど中程、中村町の公会堂を過ぎた辺りで、大きな幟旗が川風に翻っているのが目に飛び込んでくる。斎場が近ずいてきたことの安堵感と川風の心地よさに、幟旗の内容までは見落とされがちである。そこには次のような文章が書かれている。

神者依人之敬増威
（神ハ人ノ敬ニヨリテ威ヲ増シ）
人者依神之徳添運
（人ハ神ノ徳ニヨリテ運ヲ添フ）

これは鎌倉時代、時の執権北条泰時によって定められた御成敗式目（一二三二年）第一条の書き出しである。式目は鎌倉幕府の基本方針を示したもののみならず、武家法典の基本を成すものとして明治維新を迎える迄、大いに重んじられてきた。その第一条が、神社について書き始められていることに驚かされると共に、今日、忘れかけられている日本人の抱く神の姿を感じるのである。

当時、考えられていた神は、人と隔たりをもたず、それどころか人によって神として祀られることにより、自からその徳を放たれたのである。そして、人は神を信頼することにより、安心立命を得た。

互いの関係は極めて親しく、信頼の心によって結ばれていたはずである。

日取りも改まり、新たに生まれ変わる川瀬夏祭において、この時代を吹き抜ける荒川の清き風に翻る遠き先人の教えに、我々はもう一度、耳を傾けても良いのではなかろうか。

◆氏子青年会発足について

四月十五日、氏子青年会発会式が当社参集殿に於いて行われた。当日までに入会手続きを取られた会員四百三十二名（女性六十名）、内当日参加者は九十九名（女性十二名）であった。発足と同時に全国的にも大規模な会となった訳である。

氏子青年会名誉会長を兼ねる秩父神社宮司より、氏子青年会に期待する向きの言葉が贈られ、今井奎吾会長以下役員が選出された。（最終ページに写真と併記）

当初の活動方針としては、幹事会に一任ということではあるが、次の三柱からなるものと考えている。

一、歴史部会（本年テーマは秩父神社）
二、祭事部会（秩父神社祭礼について）
三、レクリエーション部会
（親睦の為の各種企画の作成など）

又、本年は大嘗祭を控えた特別な年にあたるため、大嘗祭についての研究会及び、協賛を考えていく事となった。

五十歳以上の方は名誉会員として、精神的、経済的に援助していくということで、正会員の平均年齢は大変若いものとなった。又、全国的に見ても、女性会員をこれだけ含んだ氏子青年会は、画期的なものと言える。やがて秩父を担っていくべき次期世代として、これからの神社の在り方、祭のかかわり方、又、秩父の将来を考える上での有意義な場としてくれるのではないかと期待している。

読者の声

創刊号の『投稿のおすすめ』に応えて、上宮地町にお住まいの、松本亀一氏より貴重な投稿を戴いた。同氏は、先の第二次世界大戦に従軍し、戦地にて病床に伏した折りの体験を次のように語る。

「戦友達の担ぐ担架で、地続きの北安病院に入院したのである。病名もクループ性肺炎、体温計も四十二度の目盛一杯に上昇。その夜、夢の中にハッキリと秩父神社の本殿が現れ、その中央に小学校時代の恩師、今井初男先生と、両側に顔は判然としないが近所の人らしい姿が約十名近く夢の中に現れた。その後、病気も急速に快方に向い、体力もつき、再び北満の原隊に復帰したのであった。……略

その翌年、四年ぶりに祖国の土を踏み、三日間を懐かしの我家で過ごすこととなった私は、次の話を聞かせられ、愕然としたのである。

前年の入院した時、北満の病院から『亀一病重し』の第一報が飛び、次いで『危篤』の急報に驚いた両親は、日頃信頼する小学校時代の恩師、今井初男先生宅に連絡し、隣近所の人達と共に、秩父神社で病気平癒祈願をした事が判明した。恰もその時刻が、北満の病床で夢を見たのと一致したのである。秩父から北安迄、地図上の直線距離でも四千キロメートルあり、今のように、航空便も新幹線も無い五十余年前、急報に接した両親は、唯、神様にお祈りする他なかったのである。

その後も常に神の御加護を信じて勇戦力として戦い、十余年に及ぶ軍隊生活も無事に復員したのである。年老いた今も秩父神社の社頭に立てば、唯々、有難さに自ら頭が下がる。」という内容である。

戦時下という特殊な社会状況の中、見知らぬ土地で病床に伏すという危機的状況に置かれた同氏が見たという秩父神社と、そこに集まった親しい人々は、真に同氏にとっての心の故郷であったのではないだろうか。また、親が子を思うという精神は国を隔て、幾時代を越えても決して消え去ることの無い、人の根源に属するものだと思う。

平安時代に編纂された、延喜式神名帳に掲載されている神社（延喜式内社）には、子孫がその祖神を祀った例が多い。遠く秩父神社は、知知夫彦命がその祖神であるところの、八意思兼神を祀ったことにその由緒をもつ延喜式内社である。

松本氏の両親の、子を思う精神が、神に届いたということであろうか。私共には何とも言い難いことではあるが、この経験により、松本氏が、激動の時代を生き抜いてきたことは、誰も決して、否定できないことではないだろうか。

奉賛会長交代について

井上久氏が柿原雄太郎氏に代わり、当社奉賛会長に就任された。同氏は秩父郡市医師会長を務められており、秩父の重鎮のお一人でもあられる。井上家は丹党中村氏の系統を引く家柄で、例大祭の折りには毎年御神馬を奉納する特別な神事を奉仕されている。先代、市太郎翁も長く奉賛会長を務められ、久氏もこの職務を継がれる事となった。

尚、五年間にわたりこの職に御奉仕戴いた柿原氏におかれては、その間の御労苦に深く感謝申し上げると共に、今後も引き続き大総代として変わらぬ御尽力を賜りたい。

尚、現在大総代は井上久、柿原雄太郎、浅賀政治、新井一夫、新井一永、松本眞一、宮前洋一、斎藤信介の八名各位である。

◇氏子青年会役員紹介

前列右より

会計　高野　俊彦
監事　浅賀　勝彦
副会長　大嶋　英助
名誉会長　薗田　稔宮司
会長　今井　奎吾
副会長　山中　雅文
幹事長　新井　康夫
後列右より
幹事　大曾根健次
幹事　勅使河原一昭
幹事　中　忠司
幹事　今井　祥介
監事　鈴木　建志
幹事　原嶋　修

◇武甲山ハイキング参加募集

日　時　7月29日（日）
集合時間　午前7時30分
集合場所　秩父神社参集殿前
会　費　500円（保険外）
主　催　秩父神社氏子青年会
備　考　昼食・雨具等持参　雨天中止

祥細につきましては、社務所内事務局までお問い合わせ下さい。

新人紹介

当社には祖父の代よりお世話になり、その縁がありまして奉職することとなりました。当社はもとより秩父地方に古くから伝わる祭、伝統行事を皆様と共に守っていきたいと思います。一日も早く皆様に頼りにされるよう努力していきたいと思いますのでよろしくお願い致します。

岩田勝宏(22)
昭和43年2月26日生
荒川村在住
剣道三段

私がこの仕事を選んで良かったと思うのは、色いろな思いをもってここに来る様々な人達の接点となってあげられることです。多くの人達が訪れて、そして各々の思いを胸に帰路につかれます。そんな、ほのぼのとした光景が好きです。その思いをこれからも忘れずに頑張っていきたいと思います。

小池寛子(19)
昭和46年12月10日生
日野田町在住
お花・着付など

編集後記

社叢の緑もすっかり繁り、鬱蒼とした姿を呈しています。皆様にはお変わりなくお過ごしのことと存じます。ここに社報第二号をお届け致しますので、ご一読下さい。

「柞の杜」といえば「ブッポウソウ」、そう言われて参りましたが、残念ながら現在は飛来していません。そこで当社に因んだ鳥ということで、本号の表紙を飾っている社真裏軒下の梟（フクロウ）を紹介致します。昔から知恵の神使として知られており、しかも北面を守る鳥として彫刻されたようです。胴体は正面神様に向かい、顔は北側を見据えています。正に「北辰の梟」と言えるのではないでしょうか。その梟、当社の授与品を代表する一つとしてお目見えします（写真）。

学業成就、また身の守りとしてお受けになってはいかがですか。

平成の御世のスタートに合わせ発刊された当社の社報「柞の杜」も本号でやっと第二号、まだまだスタッフも未熟ですが、氏子の皆様方との媒体としての紙面作りを心がけたいと存じます。今後ともご意見、ご要望等ございましたら、編集部宛、お寄せ頂ければ幸いです。

平成二年（一九九〇）七月二十三日
発行所　秩父総社　秩父神社社務所
〒三五六　埼玉県秩父市番場町一－一
TEL（〇四九四）二二－〇二六二
FAX（〇四九四）二二－五九六四
編集　新井直行
新井君美
印刷所　有限会社　拡文社印刷所
〒三五六　秩父市東町二十七－八